

昭和ノスタルジー／ロリマゾ（蕾の悦虐）

名札のピアスは どれいの証し



原 案 W I L L 様
小説化 濠門長恭

目次

半ズボン祥女	- 2 -
どれいの祥女	- 7 -
チンチン洗い	- 11 -
ノーパン下校	- 31 -
名札のピアス	- 37 -
はだかで通学	- 62 -
けい察公にん	- 72 -
生きうめ遊び	- 87 -
正しい使い方	- 103 -
犬小屋くらし	- 125 -
おしりアクメ	- 146 -
いろんな遊び	- 166 -
待ち遠しい夜	- 180 -
四年後の祥女	- 186 -
後書き	- 195 -

注記

※作品冒頭にもあるように、本作品の舞台は半世紀昔の日本を髣髴とさせますが、あくまでもフィクションであり、実在する歴史・人物・地名・団体・年齢などとは一切関係ありません。また、現代では差別用語とされる単語や糾弾されるべき思想なども、半世紀昔には（かろうじて）許容されていたものです。

※ヒロインの設定に合わせた漢字遣いをしています。あえて重言や同義反復、誤用（不得意要領、四角当然など）や誤字も交えています。校正ミスではありません（かなあ……）

半ズボン祥女

一九七〇年二月。来月は万国博らん会が開かれて、何百万人もの外国人が日本をおとずれる。日本が世界じゅうから注目されるんだ。それと同じころ。オレたちは最上級生になる。オレたちは下級生から注目される。下級生のもはんにならなけくてはいけないのに、山持五郎のやつときたら。

やつらのグループが森山初美ちゃんを校舎

のうらへ連れてったと聞いて、オレは友子ちゃんにはついてくるなと言いつけて、かけ出した。こういうとき、半ズボンが便利だ。どんなにオテンバしても、下着が見えない。ひざ近くまであるおとなっぽいのじゃなくて、ブルマくらいのすそだけだから、思い切り大またで走れる。ほんとはかみもオカッパにしたいんだけど、せめて女の子と分かるようにしなさいって、母さんの言いつけで長くしてる。でも、三つ編みになんかするもんか。

初美ちゃんは六人に取り囲まれていた。両手で顔をかくして泣いている。もうスカートはまくり上げられて、イチゴがらのパンツが丸見えになっていた。どころか、五郎のやつったら、それにまで手をかけている。

「こらあああっ！」

はらが立ったのと、親父に言いつけるならやってみろと思ったのとで、全力しっ走で体当たりしてやった。見事に五郎はふっ飛んでしりもちをついた。

「女の子にエッチなことをしちゃダメって、何度言わせるんだ。また真空飛びひざ金的けりを食らいたいのか」

そう。おととしの秋に、食らわせてやった。

ケンケンするひまもなく、あわをふいてぶったおれやがんの。先生からは大目玉をちょうだいしたけど、父さんは苦笑いしていた。

「おまえが男の子だったら、ほめてやってもいいんだがなあ」

子どものケンカに親は出ないってのが、父さんの教育方しんだ。さすがに、五郎の親父んところにはオレの耳をつかんで、謝りに連れてかれたけど。後で、ケンカで急所をねらうのはアンフェアだとも教えてくれた。金的とか目玉とかノドとか。だから、真空飛びひざげりは、おなかかおしりしかねらわないことにしている。

まあ、そういう過去があるから。

「覚えてろよ」

五郎のやつ。ヤクザみたいにかたをそびやかせて、にげてった。

「もう大じょう夫だよ」

まだ泣きじゃくってる初美ちゃんをだきしめてあげた。石けんのかおりがふんわりして、体がふにゃふにゃにやわらかい。弟の正太なんか、オレより三つも年下のくせして、オトナみたいにあせくさいんだから。

「すぐに大声を大声を出せばよかったのに」

オレが助けてやるから。

「だって……」

五郎の気元を損ねるのがこわいんだろう。初美ちゃんだけじゃない。クラスの子のほとんどがそうだし、先生まで、やつには遠りよしてる。この町全体が、やつの親父のおかげで成り立ってるから。

半島というより、細い道だけでつながってる山のふもとに、この町はある。昔は風待ち港として栄えてたそうだけど、今はエンジンだから寄港する船はない。山を切りくずして、その土をあちこちの造成現場へ売っている。山を切りくずす人も、港まで運んで船に積む人も、船員さんたちに物を売る人も、みんな山持家の子分みたいなもの。学校は山とは関係ないけれど、たくさん寄付をもらってるし、親父がPTA会長だから。

オレの父さんも山持の土しやを船で運んでるけど、他にも仕事はいくらでもあるそうさ。他の仕事をすると、家にいる日が少なくなる。母さんもいっしょに乗ってるから、さみしいしオレが弟と妹の面どうを見なくちゃならない。もちろん、五郎のやつをのさばらせるくらいならがまんするけど。

「ありがと、さっちゃん」

初美ちゃんがやっと泣き止んで、オレのうでの中で（ぎこちなく）ほほ笑んだ。「さっちゃん」てのは、オレのこと。白江祥女。むずかしい漢字もあるけど、シラエサチメって読む。だから「さっちゃん」。だけど、初美ちゃんは「はっちゃん」じゃなくて「みいちゃん」。もっとも、初美ちゃんは「みいちゃん」てよばれるのは好きじゃないみたい。

「初美ちゃん、ひとりで帰れる？ オレ教室にランドセルを置いてきちゃったから取りにもどる」

「アタシもいっしょに行く」

初美ちゃんがオレの左うでにすがってきた。人にたよられるって、うれしいよね。白馬の王子様——じゃなくて、リボンのき士になった気分で、初美ちゃんをエスコートしてあげた。

一部の男子からはオトコ女ってよばれてるオレの武勇伝はいくつもあるけど、まさかこれが最後になるなんて、そのときはまったく思ってもいなかった。

どれいの祥女

四月十三日、月曜日。始業式から一週間経っているけど、今日がオレと弟妹の初登校日だった。オレは自分のランドセルをせ負って、山持五郎のランドセルをむねにかかえて、五郎の後ろについて歩いている。それが、たまらなくいやだ。はずかしい。うしろの正太と美知が車道にはみ出ていないか、気を配るところじゃない。

「おは……ええっ？」

「どうして、さっちゃんが山持くんのランドセルを持ってるの？」

「おまえ、山持の子分になったのかよ」

ナゼとドウシテのあらし。

「あの……お父さんとお母さん……残念だったよね」

おくやみの言葉をかけてくれる子も、少しはいた。

三学期までは五郎をこらしめるゆいいつのそん在だったオレが、まるきり五郎のどれいみたいなことをしてるんだから、だれだって

おどろく。

「後で説明してやるよ」

五郎が鼻高だかで得意満面。しりに真空飛びひざげりを食らわしてやりたい。でも、できない。オレはこいつの子分どころか、ほんとにどれいなんだ。

「へえ。祥女がスカートはいてら。おっかしいの」

これも五郎の命令。二年前のやつだから、今着るとすごく短くて、ふつうに歩いてるだけでもパンツが見えそうなくらい。

学校じゅうの注目を浴びながら（といっても、大げさじゃない）教室に入って。

授業の前に、たん任の南井先生から余計なひと言。

「みんなも知っているでしょうが、山持さんのご両親は海なん事故でなくなられました。でも、残されたきょうだいは山持さんの家で面どうを見ていただくことになったので、こうして元通りに通学できています。けっして親無し子などとからかわず、これまでと同じように仲良くしてあげてください」

どうして、わざわざよそ行きの言葉で、そんなことを言うかな。みんな知ってることな

のに。ハリのムシロにすわらされてる気分。

居心地の悪いままに授業が進んで給食も終わって、放課後になって。

そうじ当番がつくえとイスを移動させてるのを無しして、五郎は教だんに立ってオレを横にならばせた。クラスの半分どころか、となりの組からも十人くらいが集まってくる。

「こいつは、オレのどれいになったんだ。そうだよな、サチ」

五郎が鼻高だかで得意満面なのに対して、オレは意気消ちんでペシャンコ。鼻のおくになみだがたまりかけてる。

「サチはオレのどれいだ。そうだよな？」

返事をうながされて、もつれそうになる舌で言葉をおし出した。

「はい、そうです。オレ……じゃなくてサチは、五郎……」

「ちがうだろ！」

パチンとおしりをたたかれた。下からすくい上げるようにして、パンツを直に。わざと指を曲げてしりの谷間に食いこませてきやがる。そんなに痛くはないけど、くやしい。こんなちょっと（じゃないぞ）のことにもエッチを忘れない五郎にあきれもする。

「……サチは、ご主人様のどれいです」

こいつのことは、ご主人様とよばなくちゃならない。

五郎の命令には絶対服じゅう。命にかかわるような無茶な命令はするなって、五郎の父親、じゃなくて大だんな様はくぎを差してくれたけど。

「うっそだあ。初美なら分かるけど、祥女だぜ」

「あ、でも……山持の家でお世話になるって先生が言ってたよな。それでかな」

それでだよ！

「うそじゃないよ」

五郎がムキになって言い返す。

「ろんより証こだ。サチ、パンツをぬげ」

うぐ……。覚ごはしてたし、もう、こいつにはパンツの中どころか、素っぱだかまで見られて、もっとエッチなことまでされてる。でも、クラスのみんなの前ではずかしめられることまでは、覚ごしてなかった。

だけど、パンツをぬぐのは命にかかわらないから……命令に服じゅうしなければ、オレたち三人きょうだいはバラバラになるんだ。

目をつむって（スカートはたくし上げる必

要がないくらい短いので）両手をパンツにかけて、一気に引き下ろした。

どよめきが広がった。

「そのまま、動くな。あ、手は後ろで組んで足は開いてろ」

オレの手からパンツを取り上げて、女の子だったら絶対にできないことを命令する。

それでもオレは……言われたとおりのポーズになった。

「うおおお……スジがわれてる」

「やだあ……カッちゃん、帰ろうよ」

「ヨシボウたちもよんで来いよ」

目を固くとじて悲鳴とかん声とを聞きながら、五郎のどれいになったときのことをオレは思い出していた。

チンチン洗い

父さんと母さんのおそう式が終わって、初七日も過ぎて。オレたちはこ児院へ行くことになった。父さんのご両親と母さんのお兄さんがおそう式には来てくれたんだけど、オレたちをこ児院へあずける相談をまとめると、

お骨だけ持ってすぐに帰ってしまった。父さんと船のけい約をしてた山持興産の社長（学校一の悪ガキ、山持五郎の親父さん）が、オレたちに代わって、いろんな手続をしてくれている。

し設の都合で、オレたちきょうだいは三人バラバラにされる。九日の金曜日。着がえと身の回り品と、少しだけの形見とかアルバムだけを残して、山持の親父さんの手配で家具はしょ分して、いよいよ大家さんに家を明けわたすときになって。

「みっちゃんは、お姉ちゃんとサヨナラなんて、いやだよ」

美知がオレにしがみついて泣き出した。

「しょうがないだろ。四年だけがまんしろ。学校を卒業したらしゅう職して家を借りて、お前たちをむかえに行くから」

「やだよ。お正月が四つも来るまでなんか、待てないよお」

わんわん泣きじゃくる。一才半も年上で男の子のくせに、正太までなみだをうかべてオレを見つめてる。

「パパ。三人ともうちで面どう見てやろうよ」

親父にくっついて来ていた五郎が、耳をう

たがうようなことを言った。悪ガキのくせに
パパってのもフンパンだけど、そこじゃなくて。

「バカを言え。三人とも卒業させるまでに、
いくらかかると思ってるんだ。こっちは逆に、
積み荷の損害ばいしょうをさせたいくらいな
んだぞ」

「お願いだよ。夏休みに万博へ行くのはあき
らめるし、一生、お年玉も要らないから」

「おまえ、いつまでお年玉をもらう気にいる
んだ。ワシがやらなくてもジイジとバアバと
……いや、待てよ」

五郎の親父さんは、自分の息子をきみよう
な目つきでにらんだ。

「おまえ、何かたくらんでるな？」

「オレ、祥女をどれいにしたいんだ」

どれい？

「どれい？」

オレの心の声と五郎の親父さんの声とが
いっちした。

「どれいの意味が分かって言ってるのか？」

「分かってるよ。どれいは、絶対に持ち主に
逆らっちゃいけないんだ。セイサツヨダツな
んだろ」

五郎の親父さんが苦笑をうかべた。

「そういうことか」

ちょっと考えてから、五郎にたずねた。

「この子をどれいにしたら、他の女の子にイタズラをしないと約束できるか？」

「約束する！」

五郎のやつ、うれしそうに大声で返事をした。

「どれいで遊びすぎて成績が落ちたら、こいつらはすぐこ児院へもどすぞ」

「ううう……ちゃんと勉強するよ」

今度はしぶしぶ。

「いいだろう。こいつらは山持の家で面どうを見てやろう。そして、おまえは……」

親父さんは、初めてオレに向き直った。

「息子のどれいになれ。それが、養ってやる条件だ。いいな」

良くない！

でも……。さっき、三人とも卒業させてくれるって言った。オレがしゅう職してすぐに弟と妹を養えるかという、すごくきびしいだろうってことくらい、分かってる。

それに、どれいと言っても。昔のアメリカの黒人みたいに差別されて重労働させられる

んじゃない——と、思う。他の女の子にイタズラをするな——ってことは、オレにならイタズラをしてもいいってことで——それくらいなら、がまんできるんじゃないかな。

「そんなに身構えるな」

親父さんが、ネコなで声でオレを安心させようとする。

「ビルのてっぺんから飛び下りろとか、息をするなとか、命に係わる無茶な命令はさせん」

「お姉ちゃん。ボク、し設に行く。無茶はしないでよ」

話を聞いていた正太が、泣きそうなのをこらえて、きっぱりと言ってくれた。ここで二人を見すてたら、姉として失格だ。

「……どれいになる。だから、山持の家に置いてください」

親父さんはうなずいただけだったけど、五郎のやつったら、クリスマスプレゼントとお年玉をいっぺんにもらったみたいに目をキラキラさせてた。いや、ギラギラかな。

それからが、アタフタだった。しょ分するはずだった荷物の中から、山持の家へ移す分をトラックから下ろしたり、こ児院やお役所に連らくしたり、山持の家でオレたちの部屋

を準備するまで、今の家の明けわたしを待ってもらったり。まあ、アタフタドタバタしたのは親父さんと会社の部下のオトナたちで、オレたちは部屋のすみでボケッとしてただけだったけど。

土曜日も、することがなかった。正太も美知も、三人いっしょにいられることを喜んでいて、これからは立派なお屋しきに住めるんだって、父さんの船がそうなんしたって知らされてから初めて笑ったりもしていた。オレもそれはうれしかったけど、やっぱり不安の方が大きかった。

日曜日になって、山持の家へ入ると——不安は思っていたより百倍も大きな現実となった。

げんかん口で、くつをぬぐ土間にオレたち三人ならんで正ざさせられて。山持の人たちは上がりかまちの向こうに立っている。身分ちがいつてことだ。うら口へ追いやられなかっただけ感謝しなくちゃ——ていうのは、後で考えた皮肉。

あっちは四人。父親と母親と五郎と、住みこみのお手伝いさん。これで全員。五郎が一人っ子であまやかされてるのは、だれでもが

知っている。じゃあ、なんで五郎というかっていうと、五月生まれだから。オレより半年だけ年上。

お手伝いさんは、お姉さんを過ぎてるけど、小母さんっていうとしかられそう。

年上の四人を前にして、引き取ってくださってありがとうございますとか、精いっぱいいてねいにあいさつしたんだけど。

「これからは、ボクのことをご主人様ってよぶんだぞ」

いきなりかましてくれた。けど、ボクだってさ。親の前ではネコかぶってやんの。

「おいおい、この家の主人はワシだぞ」

ご主人様のお父様（皮肉だよ）まで、悪ノリしてきた。

「パパのことは、大だんな様だよ」

昨日ずっと、そんなことを考えてたんだろう。すらっと答えやがる。

「ママは……」

「ワタクシは下らない遊びにお付き合いするつもりなどありません」

ぴしゃり。

「用があるときは、ワタクシから声をかけます。サチは、ハイと答えて、言われた通りに

しなさい」

オレを見て行っただので、ハイと答えた。

「さっそくですが、これからは五郎さんのお世話は、チヨさんに代わってサチがするのです。よろしいですね」

よろしくないけど、ハイ。こうして、オレのよばれ方はサチに決まった。

ごあいさつ（？）が終わると、オレたちの部屋へ連れてかれた。家が建てられるくらい広いうら庭のすみっこにあるプレハブの物置小屋。中身はかた付けられて、合板のゆかにムシロがしかれて、そこにオレたちの荷物が放り出されていた。整理ダンスがひとつと布団が二組なのは部屋がせまいせいだろう。あとは、こ児院へ持っていくはずだった着がえと手荷物だけ。ミカン箱が三つならべられてるのは、勉強つくえかな。電気スタンドは置かれてない。どころか、天じょうを見上げるとはだか電球すらなかった。それでも現代的なプレハブだから、十九世紀のどれい小屋よりはマシかな。皮肉を通りこしてひくつになってくる。

気を取り直して、荷物の整理。してたらお姉様が来て、ばんご飯を取りに来るように言

われた。お姉様てのは、五郎が決めたお手伝いのチョさんのよび方。

ばんご飯は、おこげ混じりが小さめのどんぶりに一ぱいずつと、頭と皮しか食べるところが残ってない焼き魚が四つと、ホウレン草のおひたしの根元の固い部分。残飯だなんて、こ児院以下だと思う。ほんとに、五郎の万国博観光費とお年玉だけしか、お金を使ってくれないのかも。

それに、まだ一度もお屋しきへ入らせてもらっていない。トイレを使わせてってお願いしたら、板囲いの所でしろと言われた。くみ取り口の上に便器がすえてあった。こんなの作ってたから、準備に丸一日もかかってたんだ。家族以外の人間が便器を使うのって気持ち悪いのは分かるけど、板囲いには屋根がない。雨がふったらカサを差しながらしなくちゃならない。

板囲いの中には、バケツと雑きんが置かれていた。使う者がそうじしなさいって意味だ。当然といえば当然だけど。

お風呂じゃなくて行水させられるのかなと心配してたら、さすがにそれはなかった。でも、行水の方がよかった。

「いっしょに入って、体を洗ってくれよ」

命令には絶対服じゅうだし、こいつの世話はオレの仕事にされたから、二重にきょひできない。

五郎についてお風呂場へ行って。

「おまえもはだかになれよ」

服を着たままでせ中を洗うなんてあまっちゃろいことは期待してなかったけど。男子に見物されながら服を（下着まで！）ぬぐなんて……全身がカアッと熱くなって、指先がふるえて、泣くかぶんなぐるかしてやりたい。

パンツまでぬいだとき。だつ衣場のドアがノック無しで開けられた。

「ワタクシやチヨさんの前に、この子を入れるなんて、とんでもないことですよ」

当主、あと取り息子、母親、使用人。この順番を守りなさいと、母親がオレをにらみつけながら息子にお説教。

「こいつには、ボクの体を洗わせるだけだ。湯船には入れさせない。昔のチヨと同じだろ」

母親は、まだオレをにらんでいたけど、息子には表情を和らげて。

「いいでしょう。長湯をするんじゃないよ」

母親が引き上げて、だつ衣場には素っぱだかの女の子と男の子の二人きり。はずかしさよりもいかりがこみ上げてくる。天てき同士。これまでは、こいつがハブでオレがマンガースだったけど、立場が逆転しちゃってる。

「ぼけっとつつ立ってないで、早く入れよ」

命令には逆らえない。両手でむねとおまたをかくしたけど、すぐ無意味になった。

「お湯につかる前には、よく洗わなくちゃな」

言い分けをして、わざとらしく何度もかけ湯をしてから、洗いイスにふんぞり返った。

「ここは一番大切なところだからな。サチが手で洗ってくれよ」

一番きたないところを、オレの手で？！

だけど、こいつのオチンチン。まるきり弟のとはちがう。年上だからオレの親指よりも太くて中指よりも長いのは分かるけど、おなかにへばりつくみたいに上を向いてる。なんて観察してる場合じゃない。

洗面器にお湯を組んでから、かぱっと足を広げてる五郎の前にひざまずいた。お湯をかけ流して。かくごを決めて、オチンチンをにぎった。

うわあ！ カチカチに固い。どうなってる

んだろ。

「あの……これ、洗っていいのか？」

「オレの命令に逆らうのか」

「そうじゃなくて……弟のともオトナのともちがう。痛くないのかなって」

「なんだ、知らないのか。女のはだかを見たりさわったりすると、チンポコはこうなるんだ」

言うだけじゃなく、むねに手をのばしてきたので、はらいのけた。

「逆らったな。パパに言いつけて、こ児院へ行かせるぞ」

「あ……ごめんなさい」

くそ、こいつにけい語なんか使っちゃった。それだけじゃなくて……むねをかばっていた手を下ろした。

「へん……」

五郎のやつ、両手でオレのおっぱい両方ともつかんだ。

「くっ……」

オレのむね、半年くらい前からち首のまわりがつき出てきて、全体もおわんのふたくらいにふくらんできてる。つき出てるのは、ちょんっとつついただけでもするどく痛いし、

ふくらんでる部分は軽くつまんでもずきずき痛い。それをわしづかみされて、泣きそうなくらいに痛い。けど、こいつに弱みなんか見せるもんか。やせがまん。

「ちえ、理香子の方がもみやすいや」

京田理香子ちゃんは、二つ三つ上の子と張り合えるくらいのグラマー。初美ちゃんとならんで、五郎のお気に入り。つまり、これまでに何度も校舎のうらへ連れてかれたり、体育用具の倉庫に引っ張りこまれたりしたことだってある。これからは、オレがそうなるんだ。

もみにくいむねは、すぐに手を放してくれた。オチンチン洗いの続き。

むにと皮をむいて、先っぽにお湯をかける。正太のは、くびれたところに白いカスが着いてることが多いけど、こいつのはきれいだった。いちおう指でこすったんだけど、オチンチンがますます太く固くなった。

五郎だけが、お湯につかって。

「こっちを向いて立てよ」

それくらい、お安いご用。安くないのは…
…

「足を開け。手でかくすな。あ、手は頭の後

ろで組んでろ」

こいつ（女だてらにオレもだけど）、テレビの『コンバット』を見てたな。手を頭の後ろで組むのはほりよのポーズだ。

足を開くのははずかしいし、わきの下が丸見えになるのもいやだった。でも、こ児院へ行かされてきょうだいバラバラになるのは、もっといやだから、命令に服じゅうした。

「われ目が開いて、中の小っちゃなビラビラまで見えてらあ」

湯船から身を乗り出して、おまたすれすれまで顔を近づけてくる。

「……………」

目をぎゅっととじて、はずかしいのをがまんした。わ……指でさわってる。ぞわあっと、せすじを悪寒がかけ上った。

「やっぱり、チンポコが生えてるんだな」

五郎がわけの分からないことを言ったと思ったら、おまたの上のあたりに電気みたいな感じが走った。

「ひゃあっ……？！」

ポーズをくずしてこしを引いた。

「動くな。もっと近寄れよ」

電気みたいな感じは消えていたので、元の

し勢にもどした。何をされたか知りたくて、目を開けてうつむいた。

五郎がわれ目の合わさっているあたりへ指をのばして来て……

「あっ……？！」

また電気が走ったけど、覚ごしていたから体は動かさなかった。

五郎の指がくねくね動くと、立て続けに電気が走った。指にほじくり起こされて、小豆くらいの大きさのイボがわれ目の中から飛び出てる。それを五郎がつまんで……

「きゃああっ……？！」

くりゅんと、何かが動いて——ずうんと、電気がこしをつきぬけた。またポーズをくずして、五郎にしかられて。

くりゅんくりゅんと小豆みたいなイボをしごかれると、太い電気が立て続けにこしをつきぬける。

「気持ちいいだろ？」

いくない。あせまみれになって夏の風にふかれる気持ち良さとも、寒い冬に温かいお風呂にはいる気持ち良さとも、かけはなれてる。くすぐったいようなせすじがゾクゾクするような、こしがジインとしびれるような……頭

が真っ白になってく。目を開けてられない。
気持ち悪いんじゃない。これが初美ちゃんの
指だったら、いつまでも続けてほしい。でも、
五郎の指はいやだ。

「ふうん？」

指が放れた。と思ったら……

「ぎゃんっ……！」

おまたからのう天まで激痛がつらぬいた。
両手でおまたをおさえて、へたりこんじゃった。

「こら、ちゃんと立てよ」

どうにか立ち上がったけど、ひざが笑って
こしがガクガクしてる。五郎の指がおまたに
近づいてくる。

（あっ……！）

五郎が中指を曲げて親指で止めている。デ
コピンだ。イボにデコピンされたんだ。

「やめて……」

後ずさった。

「にげるな。足を開いて、じっとしてろ」

正太と美知の顔を頭にうかべて、ありった
けの勇気をふりしぼって、オレはその命令に
服じゅうした。きっと、半泣きの顔をしてた
と思う。

ピシッ……五郎の指がはねて。

「ぎびいっ……！」

覚ごしてたけど、悲鳴はおさえられなかった。ほりよのポーズは保てたけど、反しゃ的にこしが引けてしまった。

「これからは、すぐに服じゅうしなかったら、コチピンを食らわせるからな」

「コチピン……？」

「ちっちゃなチンポ、コチンポにデコピンだから、コチピンだ」

センスの悪い名前。センスが良けりゃ許されるってもんじゃないけど。

「コチピンでも服じゅうしなかったら、もっとすごいバツを考えてやるぞ」

おどされて、でも安心した部分もあった。なんでもかんでも父親に言いつけられて、すぐにこ児院へ送られるってわけじゃなさそうだ。

「そのかわり、いい子にしてたら、さっきみたいに気持ち良くしてやる」

気持ち……良いか悪いかって聞かれたら、良いって答えるしかない。でも、五郎になんか気持ち良くしてほしくない。だって、そうだろ。初美ちゃんとか理香子ちゃんとか（深

い意味はないよ。これまで出てきた名前だから使っただけ）と手をつなぐのは楽しいし、林陽太くん（いきなり、この名前を出したのには深い意味があるかな？）と手をつなげたら幸せ気分になると思うけど、五郎とだなんて最低最悪。つまり、相手の問題。

「もう一発だ」

五郎が指をデコピンの形に曲げてつき出す。「気持ち良くしてくださいっておねだりするなら、そっちにしてやるぞ」

だれがするもんか。でも……コチピンは絶対にいやだ。

「……………」

「だまってるで、なんとか言えよ」

返事をする代わりに、オレはしゃがみこんだ。いきなりドアが開いて母親が現われたから。でも、五郎におまたのおくまでのぞきこまれて平然と（じゃない！）立ってたのに、女の人におしりを見られたくらいではずかしいなんて、オレむじゅんしてるかな。

「五郎さん、長湯はやめなさいと言ってるでしょ。早く上がりなさい」

五郎は湯船から出て、まだ洗ってないのに、いい加減に体をふいて、だつ衣場へにげてっ

た。エッチなイタズラをしてるところを見つけたんだから、そうなるよね。

オレもにげようとしたら、しかられた。

「サチは残ってなさい。聞きたいことがあります。なんですか、お行ぎが悪い。目上の者を待つときには正ざでしょ」

固いタイルの上に正ざさせられた。

母親も出てって。五郎が服を着てだつ衣場から出て行き、入れかわりに母親の気配がして。正ざで十分以上も待たされてから、母親がはだかで入ってきた。

オレの目の前にしゃがんでかけ湯をして、毛むくじゃらのおまても洗った。水がはねるのですみへよけようとしたら、動くんじゃないって、しかられた。いやがらせだね。湯船につかる前には立ち上がってからかけ湯をしたんだから。おかげですぶぬれ。

「おまえ、もう生理はあるの？」

いきなり質問された。女の子の間の内しよ話で聞いたことがある言葉だけど、エッチなことと関係があるらしいってウワサしか知らない。のを、母親も察したのかな。

「分からないのなら、それでよろしいです。でも、ショチョウ——かくす所から血が出た

ら、必ずワタクシに言うのです。分かりましたね」

「あの……カクストコロって、おまたのわれ目のことですか？」

母親は顔を赤くしてヒステリーにさげんだ。

「はしたない。つつしみを知らない」

追い出された。

一時間くらい経ってから、おチヨさんじゃなくてお姉様が物置小屋へ来て、オレたちもお風呂を使っていいと教えてくれたとき、母親からの伝言もあった。これからはきちんと女言葉を使えってさ。五郎からの追しんもあった。一人しょうはサチにしろって。小さい子じゃあるまいし、みっともはずかしいっらない。

気を取り直して三人でお風呂へ行ったら、お湯がべとべと。ガス湯わかし器は使うなって言われてるから、三人ならんでいっしょに入った。そうしないと、お湯が少なくてかたまでつかれなかった。

それから。お姉様の言いつけで、お風呂そうじ。その前に、自分たちの洗たく物を残り湯で洗って。それからお湯をぬいて、三人で手分けして湯船もゆかも洗った。お世話にな

ってるんだし（どれいなんだし！）これくらいは当然だけど。次から次へとお手伝いさんの仕事をおしつけられそうな予感がする。お風呂そうじは、正太と美知は遊びみたいに楽しんでたけど、毎日だとどうかな。

——こうして、新しい（少なくともオレにとってはみじめな）生活が始まった。

ノーパン下校

そして、五郎のカバン持ちをやらされて、はき慣れない（つんつるてんの）スカートで登校して、放課後はクラスメートの前でパンツをぬいでいる。

「こんなのは、良くないよ」

勇気ある発言をしたのは長野勉くんだった。「女の子にパンツをぬがさすのもそうだけど、どれいだなんて基本的人権に反している。けん法い反だ」

むずかしい言葉だけど、オレをかばってくれてるんだよね。

「遊びだよ。どれいごっこだ。こいつだって面白がってるんだから。そうだろ、サチ」

ちがうとうったえたい。でも、そうしたらどうなるか分からないほど、オレもバカじゃない。

「そうだよ。オレ、面白いから五郎につき合ってるんだ」

長野くんを信じさせようと考えて、禁止されてる男言葉を使った。

オレは面白がってるんだから、目をつむってちゃ変に思われる。目を開けたら――後ろのはなれた所にいる長野くんをふり返っているのは五郎だけだった。女子はいつの間にか一人もいなくなって、男子は増えている。全員の視線が一か所に集中している。

はずかしさで頭がくらくらしてきて。長野くんは、まだうたがわしように五郎を見ているし。場を取りつくろおうと思ったのかな。自分でもよく分からないけど、とんでもないことを口走っちゃった。

「オレ、こういうエッチな遊び、大好きだよ」

教室全体がどよめいた。

「じゃあ、もっとエッチな格好をしろよ」

「自分の手でわれ目を開いて見せろよ」

「女の子にも小さなチンポがあるって五郎が言ってる。ほんとか」

みんな好き勝手なことを言って、オレじゃなく五郎をたきつけてる。オレがやつのあやつり人形だって、見ぬいてる。

「チョットダケヨをやれよ！」

だれかがさけんで、賛成の声がわき起こった。

「なんだよ、それ？」

意外にも、五郎がキョトンとしてる。他にも何人か。

去年から始まった番組の中のコントなんだけど、低ぞく番組で子どもの教育に悪いって、見せない家庭もあるそうだ。オレンちは、両親とも航海中だったりするから見てるけど。五郎んちが教育ママゴンとは……昨夜のことを思うと、さもアリナミンかもしれない。

「ご主人様は知らないってよ。さっちゃんが教えてやれよ」

「プワ～パパラパ PAPU～ン」

曲の口真似をするやつもいた。

「やれよ。命令だ」

五郎が不気元そうに言った。エッチに関係することで他の子が知ってるのに自分は知らなかったてのが、くやしいんだろう。その情熱を勉強に向ければいいのに。

とにかく。命令されちゃったんだから。オレは右手のこうを左のほっぺに当てながらこしをくねらせて……上着をぬいだ。コントだ
とここまでだけ。

「いいぞ、いいぞ」

「全部ぬげよ」

ヒューヒューと指笛を鳴らすやつもいたりして。

五郎の様子をうかがうと、不気元が直ってない。かくごを決め直して、ブラウスとはだ着もぬいだ。

短いスカートだけで教だんにねそべって体をねじってかた足を立てて。

「ちょっとだけよ」

立てたかた足を折り曲げた。パンツは最初にぬいでるから、立って足を開いてるより、ずっとはずかしい。

どよめきも指笛も消えて。男子の顔が、ぐぐっとおまたに近寄った。

「こら、何をしてる！」

たん任の南井先生がろう下からどなって、教室に入ってきた。女子が言いつけてくれたんだらう。

オレの横に立ってる山持のおぼっちゃんに

気づくと、先生は急にトーンダウン。

「あのな……そういうことは、教室ではするな」

校舎のうらとか倉庫ならかまわない——とは言わなかったけど。

「祥女も男子をあおるんじゃない。早く服を着ろ」

オレが悪いような言い方。しかも、はだかの女の子を男子の群れの中にほっぽり出したまま、教室から出て行った。

でもまあ、水を差されたって感じになって、ストリップショーはお開きになった。オレは先生の言いつけ通りに服を着たんだけど、パンツはだれか（知らん顔してるけど、絶対に五郎だ）に取られてしまった。ので、ノーパンで帰らなくちゃならなかった。

低学年の子が着るみたいな、ふつうに歩いててもパンツが見えてしまいそうな短いスカート。それをノーパンなんだから、気が気じゃなかった。おしりもおまともスウスウ風が通りぬけて、一歩ごとにはずかしさがつづいた。すそをおさえたくても、前でかかえてるランドセルから手を放すと、せ負いベルトがうでからずり落ちる。

家に帰り着いたときには、すごく風通しが良かったのに、なぜかわれ目のまわりにあせをかいていた。

どれいの役目は、それで終わったわけじゃない。

五郎がお風呂に入るときはおともをして、素手でオチンチンを洗わされた。やつがお湯につかっている間はタイルの上に正ざで待たされて、今日はむねもせ中も手も足も（素手じゃなくて、石けんをつけたタオルで）洗わされた。

それから。

「チョットダケヨを知ってるなんて、女の子のくせして下品だ」

八つ当たりされて、ほりよのポーズにさせられて——コチピンされた。われ目のとじ合わさってるところにうもれてる女の子の小チンチンへのデコピン。悲鳴を上げてうずくまりたくなかったけど、意地と根性で歯を食いしばってどっちもがまんした。

名札のピアス

よく日も「ご主人様」のランドセル持ち。正太と美知は、それぞれの同級生たちといっしょに先に登校させた。お姉ちゃんの無様な格好を見せたくない。

短いスカートだと、すわるとパンツが直にイスに当たる。身じろぎすると、パンツとはだがこすれ合ってくすぐたい。休み時間になるたびに、校舎のうらへ連れてかれるんじゃないか、無理なん題をふっかけてくるんじゃないかとびくびくしてた（われながら情けない。リボンのき士は返上だ）けど、気味が悪いくらい平おん無事に過ぎた。

平おん過ぎた。オレ、男子にはけむたがられてるけど、女子には好かれてる。初美ちゃんみたいになついてくれてる子もいる。なのに、今日は休み時間になってもオレのまわりにだれも集まらなかったし、話しかけてもこなかった。

それ以上に。五郎がいつもの取りまきだけでなく、長野くんみたいに成績ゆうしゅう

品行方正な子をのぞく男子のだれかれに耳打ちしながら、オレをちらちら見てたのも気になった。

放課後になって、耳打ちの内容が、やっぱりオレをいじめる相談だったと分かった。

二十人以上に取り囲まれて連れてかれたのは、保健室。

「先生。白江さんが気分が悪いそうです。休ませてあげてください」

ベッドにねかされた。五郎たちは出て行こうとしないどころか。

「ぼくたちでかん病します。先生は一時間くらい、よそで息ぬきしててください」

ろこつに、先生を追い出しにかかった。

「……………」

富田先生は、オレをあわれむみたいに見下ろしてから、無言で出てった。オレが、なにかエッチなイタズラをされると察して、でも助けてくれないんだ。

先生が出て行くと、五郎たちは毛布をはぎ取って、オレの手足を大の字におさえつけて、パンツまでカイボウした。

昨日のチョットダケヨよりは、くやしくなかった。だって、昨日は自分で動いてはずか

しいことをしなければならなかった。今日は、大勢の男子におさえつけられて、ていこうできない。あきらめがつく。

「どれいのくせに、昨日はご主人様を差し置いて勝手な真似をしたよな」

チョットダケヨを知らなかったのが、そんなにくやしいんだ。

「どれいってのは、ご主人様の所有物なんだ。分かってるよな」

「……覚ごしてるさ」

パチン。ちょっとしか痛くなかったけど、ビンタされた。

「分かってないから、おふくろの言いつけまで無しして男言葉を使ってるんだ」

五郎がランドセルのポケットをさぐって、金属の輪っかにぶら下がった名札を取り出した。文ぼう具屋で売ってる、カギなんかにつけるやつだ。一円玉二個をならべたくらいのが二つと、もすこし大きいのと。小さな名札には「どれい」「サチメ」と書いてある。大きなのには、うら表に「所有者」「山持五郎」。漢字の名札はきれいな字だから、父親じゃなくて大だんな様に書いてもらったんだろう。ごっこ遊びに親が出てくるのかよ。

「これを、おまえに付けてやる」

勝手にしろ。五郎の見ていないときには外しておくさ。

五郎は、小さな二つの名札をち首に、大きい方は女の子のオチンチンの上に置いた。

「うれしいだろ。うれしいよな」

「……うれしいです」ぼう読み。

「それじゃ、さっそく付けてやる」

五郎がキリとか大きな消しゴムとかを取り出した。なんか、とんでもないことをたくらんでる気がする。うれしいなんて、答えるんじゃないかった。

五郎が子分にオレのち首をつまんで引っ張らせる。痛いけど、口に出せなかった。やつの気元を損ねるだけだし——何をされるか不安でこわくなってきた。

ち首の内側に消しゴムがおし付けられた。外側にキリの先っぽが当てがわれて……

「なにするんだ。まさか……きやあああっ！痛い！」

ぶすうっと、キリをつき通された。

「やめろ！ 痛い！ 痛いいいい！」

二のうでまでおさえつけられて、身動きできない。キリはち首をつき通しただけじゃな

くて……予防注しやの十倍以上も太いきりの先が、うでより百倍もびん感なち首をぐりぐりとえぐった。ち首だけじゃなく、すこしだけふくらんできたおっぱい全体が、流れ出た血で赤くそまった。

キリが引きぬかれた。ますます、血が出てくる。五郎が子分に戸だなから消毒用アルコールとだっし綿を持ってこさせて、それでち首をふいた。

「ぎいいい……」

きず口にアルコールがしみる。

金属の輪っかがち首に近づけられた。輪っかは細いはり金が二重に丸められてる。そのはしを五郎がつめでこじ開けて、ち首に明けられたあなに通した。

「お願いだ。そんなの、やめてくれ……きひい！」

二本のはり金にち首をはさまれた。

「女言葉を使えって、おふくろが言っただろ。それと、けい語。言い直せ」

言い直したら、許してもらえるかもしれない。

「お願いです。こんなことはやめてください……ご主人様」

輪っかのすき間が広げられて、すこしだけ痛いのが減った。けど、やめてくれない。

「名札を付けるのがうれしいって言ったのはサチだぞ」

「こんなことをされるなんて……痛い！　ごめんなさい」

またち首をはさまれたので、くやしいけど謝った。

「ちゃんと付けてやるから、おとなしくしてろ」

つめではり金のすき間を広げながら、五郎が金属の輪っかを回す。

きずを内側からギチギチとこすられて、ものすごく痛い。けど、キリでつきさされたときほどじゃないので、おとなしくしてた。

金属の輪っかが二回転して、完全にち首をかん通した。

「よし、次はこっちだ」

まだきずついてない方のち首がつままれて、消しゴムがおし当てられた。

オレは、やめてくださいなんてムダな願いはしなかった。それよりも……大きい方の名札をどこに付けられるか、予想できてしまったので、まさかまさかまさかと、そればっ

かり考えて、おびえてた。女の子の小さなオチンチンは、ち首よりずっとびん感だと、じゅうぶんに思い知らされてる。

何をされるか分かっていても（分かってるからこそ）、痛いものは痛い。左のち首にキリをつきさされて、やっぱり悲鳴を上げてしまったし、目のふちにあせまで流れてしまった。

ドアがひかえ目にノックされた。

ぎくっと五郎がふり返って、ベッドのまわりのカーテンを引いた。

「外まで声が聞こえると、こまるの。もうすこしだけ、静かにしてもらえる？」

富田先生の声が聞こえた。きっと、保健室の外で、人を近づけないように見張ってたんだろう。まるきり、五郎の子分だ。

ドアのしまる音がして、五郎がカーテンの内側にもどって来た。

「それじゃ、最後の名札を付けるぞ」

「でも……真空管が静かにしろって言ってたし」

真空管は、富田先生のあだ名。トランジスタ・グラマーてのがあるよね。小がらだけどおっぱいが大きくておしりも張ってる女の人のこと。でも富田先生は男性なみに大がらな

ので、トランジスターじゃなくて真空管。なことは、どうだっていい。

「静かにさせればいいんだろ」

五郎があたりを見回して。オレの上ばきを拾い上げた。

「口を開けろ」

「んんん……」

くちびるを引き結んで、かぶりをふった。

「ご主人様の命令には絶対服じゅうだろ」

できることと、できないことがある。つきつめて考えると……女の子のオチンチンにキリであなを明けられて名札を付けられるか、きょうだい三人生き別れになるか。その選たくだ。けど、三人まとめて山持の父親に面どうを見てもらってる限り、こんな無茶苦茶が毎日のようにくり返される。

「強情だな」

んん……鼻をつままれた。息ができない、口を開けたら、上ばきをつっこまれる。だけど、強情を張り続けても、それが何分かおそくなるだけだ。オレは観念して、口を開けた。

ぐぼっと、のどのあたりまでつっこまれた。

「んゝむゝうゝうゝ……」

くつ底で舌をおさえこまれて、はき出すこ

ともできなくなった。

「それじゃ、オレたちにとっては小さな一歩だけど、おまえには大きな一歩をきざんでやるよ」

むずかしいことを言ってると思ったら——人類で初めて月面に下り立ったアポロ 11 号のアームストロング船長の名セリフのもじりだった。

ふっと、空気が変わった。五郎だけでなく、全員がしいんと静まり返った。

女の子の小さなオチンチンをつままれて、びくんとこしがはねた。のを、おさえこまれて。

「んんん……」

女の子の小さなオチンチンに消しゴムがおし付けられた。オレからは、上ばきがじゃまで見えない。だから、不安が強まった——のは、いっしゅんだった。

コチピンとはまったく性質のことなるするどいしょう激が、おまたでばく発した。

「むゝいゝいゝいゝいゝっ……！！」

しょう激がのう天までつきぬけた。

男子の体重をはね返して、こしがはねた。

ガタン、ギシギシ……ベッドがきしんだ。

「んふう、んふう、んふう……」

全力しっ走を十回もくり返したみたいに、
息が苦しい。

「うわ、びびんちょ！」

「おしっこ、もらしてらあ」

はしゃいでるみたいな男子の声が聞こえた。

うう……はずかしい。ようち園でも、おも
らしなんかしなかったのに。

「ちょうどいいや。消毒になる」

でも、だれかが雑きんを持ってきて、おま
たをふいてくれた。

それからまた、しみるアルコール消毒をさ
れて。絶対にあばれないように二人がかりで
こしをおさえつけられて――金属の輪っかを
女の子の小さなオチンチンに取り付けられた。

「できた。立ってみろよ」

立てない。うでを引っ張られ、かたをおさ
れて、ベッドからずり落ちた。

ベッドの上には、カイボウされたオレの服
が残されたけど、血とおしっこでぐしゃぐし
ゃになってた。シーツにまでしみこんでる。

オレは両側から支えられて、すがた見の前
へ連れてかれた。鏡に写る自分のすがたは、
目をそむけたくなるほど悲さんだった。血ま

みれなのは、洗えばきれいになるけど。ち首から提げた名札が、すごくみじめだった。女の子の小さなオチンチンの名札に書かれた「所有者」の文字が、くやしくて情けなくてはらが立って——こういうのを、クツジョクっていうんだろう。

五郎が見てないときは外しておくつもりだったけど、自分で外せるだろうか。もし外せても、付け直せるだろうか。

「まだ血が止まらない。真空管に手当てしてもらった方がいいんじゃないか？」

だれかが、心配そうに言った。オレのことを心配してるんじゃないくて、先生におこられるのが心配なんだろう。

「おかしいな。そんなに出血しないって、書いてあったんだけど」

本で読みかじった知識を、いきなりオレに試したんだ。モルモットあつかいだ。これまでは五郎のことは、もちろん軽べつしていた。それでも、他の子のひ害がなくなるなら、オレばかりがエッチなことをされても、できるだけがまんしてやろうと、自分に言い聞かせてた。

でも、今は……五郎がこわい。こんなの、

エッチなことじゃない。もっと、ずっと残くなことだ。

ぶんなぐって、真空飛びひざ金的げりを食らわしてやりたいと思う。なのに、どうしても、心の底からにくむ気にはなれなかった。こいつが親父さんにおねだりしてくれなかったら、今ごろはきょうだい三人が別べつのし設に入れられてたって、その思義を感じてるからだろうか。

五郎がキノホルム粉をち首とコチンコ（いちいち、女の子の小さなオチンチンなんて言うのはめんどうだ——と考えられるくらいには落ち着きを取りもどしてた）にふりかけてくれた。同じ黄色だけど、液体のヨーチンとちがって、きず口にしみない。でも、キリで明けたあなにすりこまれたので、また悲鳴を上げてしまった。

らん暴な手当のおかげで、血はじきに止まった。アルコールをしませただっし綿で血のりをふき取り始めたんだけど、やっぱりらん暴。輪っかをこねくったりするもんだから、できるだけいねいな言葉づかいでお願いして、自分できれいにした。

すぐに、きれいにするんじゃないかと後

かいした。

「これなら大じょう夫だな。帰るぞ」

え……？

帰るったって、オレの服はぐちゃぐちゃだぞ。こんなの着て外を歩いたら、大さわぎになる。あ、そうだ。

オレは保健室のすみにある小さなタンスを開けた。低学年の子のおもらしなんかに備えて、下着が入れてある。もしかしたら、体そう服くらいあるかも。

「何やってんだ。早く来いよ」

五郎に急かされたので事情を説明したら、コチンコに名札を付けるよりも、もっと無茶苦茶を言われた。

「そのままでいいじゃないか。サチがどれいになったと、学校の外のオトナたちにもせん伝してやるよ」

血とおしっこまみれの服を着て歩くより、もっと大さわぎになる！

「そんなの……ご主人様がこまると思います」

オレがいやだって言っても聞いてもらえないに決まってるから、とっさに知えをしぼった。

「オレはこまらないよ」

「はだかで外を歩いたら、しかられます。おまわりさんにタイホされます」

公然ワイセツとかってやつ。

「そうなるかどうか、試してみよう」

オレのうでをつかんで、ぐいぐい引っ張る。

「ダメ……許してください！」

コチンコにキリをつき通されてもがまんしてたのに、泣きそうになった。

「おまえらも手伝えよ」

後ろからもおされて、とうとう保健室から連れ出された。

富田先生、おどろいた顔でオレと五郎を見比べていたけど。

「あ、職員室で打ち合わせがあったわ……」

見えすいた言い分けをしてにげてった。さわらぬ山持にタタリ無し。

足をふん張ってていこうしたけど。五郎にうでを引っ張られ、男子二人にせ中とおしりをおされて、ずるずるとろう下を引きずられてった。

下た箱まで連れ出されたところで、あきらめた。男子三人の力に逆らうのは不可能だ。

はだかで（しかも、みょうちくりんな名札まで付けられて）外を歩くのは、死んでしま

いたいくらいにはずかしい。だけでなくて犯罪だ。でも……真犯人は五郎だって、おまわりさんも分かってくれるだろう。タイホされるのは五郎だ。

そう思って自分をなぐさめたけど。五郎がタイホされたら……オレたちだってこまる。やつの成績が下がるだけで、オレたちきょうだいはバラバラのこ児院へ入れられる。タイホされたって同じだろう。それに気づいたら、ものすごく悲しくなって……しゃくり上げてしまった。

「こら、サチは面白がってどれいごっこをしてるんだろ。泣くなんて変だぞ」

そんなこと言われたって。面白いって、無理矢理に言わされただけで、ほんとはいやだしはずかしいし、くやしくて、はらが立って……。

なのに。オレはしゃっくりを飲みこんで、手で目をこすってなみだを止めた。

オレは、どうなったってかまわない。正太と美知といっしょにくらせるなら、なんだってがまんする。二度と泣くもんか。

男子に囲まれて、素っぱだかで校庭へ出て。

ふつうは一糸まとわぬっていう形容がくつつくけど、オレはちがってる。名札を三つも身に着けて、くつ下と外ばきをはいてる。だけじゃない。自分のランドセルをせ負って、五郎のまで——その上に積み重ねられた。

「前で持つと名札がかくれるからな」

耳のあたりに来ているせ負いベルトにうでを通すと、まるでハリツケにされたみたいな格好だ。それはがまんする（もんか！）けど、手がちゅうにういて、おまたどころかむねもかくせなくなった。

「あ、そうだ。犬を放し飼いにしちゃいけなかったんだ」

オレはどれいだけど犬じゃない。自分で反発して、自分で情けなくなった。

五郎はオレをしゃがませて、自分のランドセルからナワトビを取り出した。それをオレの首にまき付けて、余ってのびてるロープのグリップを手を持った。

「ハイヨー、シルバー」

ぱしんと、おしりをたたかれた。犬にされたり馬にされたり、いそがしい。くらいにふざけてないと、はずかしさで気がくるいそうになる。そういう意味では、ち首とコチンコ

がずきずき痛いのがありがたいのかもしれない。はずかしがってる余ゆうがなくなる。

きみような格好で校庭をつつ切るオレを、まだ学校に残ってた生徒が、あっ気にとられてながめてる。でも、先生のすがたはなかった。くそ度きょうを決めてあたりを見わたしたら、まどの向こうからこっちを見てる先生が何人かいた。

くそ、東ドイツも西ドイツも、さわらぬ山持にタタリ無しだ。生徒だって似たようなもの。事情を理解できない低学年の子がこっちへ来ようとするのを、高学年の子が引き止めている。事情をりかいしてる男子の半分くらいは事情を理解して、見物に集まってくる。正太と美知を先に帰しといて正解だった。

校門を出ると五郎の指図で、交通のさまたげにならないよう野次馬はじゅう隊になった。先頭はオレひとりで、すぐ後ろに五郎。三十人もの男子が二列になってついて来てる。

後ろをふり返る気にもなれず、五郎のランドセルに頭をおされて、地面を見ながら歩いた。さらし者とか引き回しといった、時代げきの言葉が頭にちらつく。

通学路でも、さわらぬ山持にタタリ無しが

続いた。

向こうから来る人は、オレのすがたを見てギョッとして。後ろを歩いてる五郎に気づくと目が泳ぐ。わざとらしく横道に曲がったり、引き返す人もいた。毎日通ってる道だから、顔見知りの人もたくさんいる。いつもならあいさつをするけど、今日はどっちも知らんぷり。でも、顔に表われてる。事情を察して同情してくれる人が多いけど、さげすんだ目を向ける人や、五郎でなくオレをにらみつける人もいた。さげすんだりにらみつけるのは、小母さんが多い。

歩くたびに名札がゆれて、ち首がずきずき痛いし、コチンコは連続して引き千切られてるくらいに激痛をこしへ送りつけてくる。そろりそろりと、ゆっくり歩いてるのに、後ろから追いこす人はほとんどいなかった。ほとんどというのは、何人かの男の人が、後ろから近づいて来て、追いこさないで足をゆるめて、まじまじとオレを見つめたから。

「山持のぼっちゃんだろ。変わった遊びをしてるね」

おべっかを使った人もいた。

「そうだよ。どれいごっこだ。サチも面白が

ってるよ」

おまわりさんに通報されないために、無理して作り笑いをするしかなかった。

「まっすぐ帰るんだよ。みんながみんな、ぼっちちゃんのことを知ってるとは限らないからね」

「知らないなら教えてやる」

バチンと、不意打ちにナワトビのグリップでおしりをたたかれた。

「きゃ……つうう！」

たたかれたのは、そんなにいたくなかったけど、おどろいてこしがにげて、その動きが名札をゆらしたので、コチンコがすごく痛かった。

その人はオレとならんで歩きながら、まだ何か言いたそうにしてたけど、それ以上は何も言わずに足早に去って行った。

山持のお屋しきは高台にある。その手前でじゅう隊は解散した。とたんに、五郎が早く歩き出した。オレの前に立って、ぐいぐいと首のナワトビを引っ張る。ついて行くしかないんだけど、歩はばを大きくすると、一步ごとに太ももが名札に当たってゆれて、コチンコが痛い。ランドセルがずれてきたので、よ

いしょとかたで持ち上げたら、ち首にも激痛が走った。

そのせいだろう。お屋しきに着いたときには、名札が血でよごれていた。

五郎はそのまま表門から入って、オレはうら門へまわって、家の人にも弟たちにも見つからないように、どろぼうみたいにしのびこんだ。

名札は、やっぱり自分では外せそうになかった。無理に輪っかを広げてまわそうとしたら、はり金の先がきず口にささって、キリでつきさされたときの次くらいに痛かった。

仕方がないので、みじめな格好のまま物置小屋へはいった。正太も美知も、びっくりしておびえて、泣き出しそうな顔になった。

「ご主人様としてるどれいごっこの続きなんだ。お姉ちゃんは平気だよ」

二人とも、泣かずにこらえてくれた。正太は健気にも、勝手口まで行ってチヨさんから救急箱を借りて来てくれた。それで血止めをしたけど、服を着たら名札がすれてまた出血するかもしれないので、部屋のすみにチリ紙をしいて、はだかのままその上で体育すわりをした。

ばんご飯をもらいに行くのは、正太が代わってくれた。

お風呂でご主人様の体を洗うよう、お姉様から言いつかったんだけど、勝手口に母親が出て来て、追い返された。

「家の中がよごれます。きずが治るまで、しき居をまたぐことは許しません」

結果として五郎の命令に服じゅうしなかったから、後でバツを受けるんじゃないかと心配になった。心配のあまり、あれこれ考えるうちに、とんでもないむじゅんに気づいた。

もしも、五郎が「あれをしろ」と命令して、父親や母親が「あれはするな」と言ったら、オレはどうしたらいいんだろう。とくに、父親。オレたちの生活費を出してくれてるんだから、逆らったらこ児院へ行かされるかもしれない。

何日か後で五郎に相談したら、また無茶苦茶を言われた。

「親父とおふくろじゃ、しょうがないな。言うことを聞いとけ。でも、不服じゅうのバツは覚ごしとけよ」

さいわい、その夜は五郎からバツを受けなかったし、次の日から母親の言いつけを最

後まで守れた。きずが治るまで、一度もおやしきに足をふみ入れなかったんだ。

というのも。よく朝になって、オレが高熱を發したから。

熱だけじゃない。キリで明けられたあなうんで、ち首もコチンコもふだんの三倍以上にはれてしまった。今度も正太がチヨさんに話してくれて――父親と五郎が様子を見に來た。

父親は、オレの名札を見て五郎をしかってくれた。

「バックナンバーが見当たらんと思っていたら、やっぱりおまえか。ピアスの記事を読んで、いい加減なサル真似をしたな」

生かじりの知識でオレを実験台にしたんだ。それも、本に書いてある内容をちゃんと理解してなかったらしい。

「だって……むずかしい漢字がいっぱいで、さし絵しか分からなかった」

「この大バカ者！」

父親はチヨさんに、お医者さんをよぶよう言いつけた。

「ワシは仕事がある。おまえは学校を休んで

サチのかん病をしてやれ」

「ええー？」

「おまえのどれいだろうが。飼主としての責任を果たせ」

所有されるのと飼われるのと、どっちがましなんだろうか。

父親は最後に、五郎をしかるんじゃないくてけしかけた。

「これからは、目新しいことを始める前にワシに相談しろ。ドクダンセンコウは許さん」

どんな漢字を当てるのか知らないけど、意味はだいたい分かった。

「はあい」

五郎は複雑な顔で返事をした。エッチ（名札は残こくだけど）な事をするのを親には知られたくない。でも、大ベテランが指導してくれるのはありがたい。そんな心境だろう。

お医者さんは三十分もしないうちにかけつけてくれた。三年くらい前で別のお医者さんの話だけど、美知が命にかかわるんじゃないかってくらいの引きつけを起こしたときでも、往しんしてくれたのは電話して二時間後だった。やっぱり、山持のけん力だよな。

きずの手当てをしてくれて、こう生物質の

注しやと栄養点てきをしてくれて、おかげでねこんだのは一日だけですんだ。さらによく日も学校を休んで、お医者さんは毎日朝夕に往しんしてきずの手当てをしてくれたので、三日目の金曜の朝にはだいぶん良くなった。

けど、山持のけん力は当然だけど、オレにとっては悪い方向へ働くことが多い。お医者さんはピンセットを使って、金属の輪っかを外そうとしてくれたけど、五郎が絶対に許さなかった。

「ピアスをつけたまま、ときどき動かせば、あなが開いたままで安定するんだ」

ピアスってのは、耳かざりなんかをネジで両側からしめ付けて止めるんじゃないくて、身体にあなを明けるやり方のこと。というのは、五郎と父親とのやり取りでオレにも分かっていた。でも、このあなが安定するって。一生明いたままになっちゃうんだろうか。そんなのいやだけど——お医者さんも、さわらぬ山持にタタリ無しだった。

あ、金属の輪っかはん単には外せないけど、名前が書いてあるプラスチックの本体は小さな知えの輪みたいな別の金具で輪っかにつながってるので、自分でも着だつできる。

外出するとき以外は着けなくていいと、五郎が許してくれた。

五郎のやつは、かん病の意味をかく大解しゃくして、朝昼ばんの三回、物置小屋へ来ては、金属の輪っかをくるくる回して――遊んでやがった。でも、そのおかげだろう。金曜には輪っかを引っ張っても（痛い！）出血はしなくなっていた。

それを確かめると、五郎はうれしそうに言った。

「よし、今日から登校しろ。親父の許可はもらってる」

まだち首もコチンコもふだんの倍以上にはれてて、はだ着一まいでもすれて痛いっていうのに。

それをうったえたら、もっとひどい無茶苦茶が返ってきた。

「服を着なけりゃ、問題ないだろ。これからは、名札のピアスだけ。素っぱだかで通学しろ」

「……………」

文句を言ったら、もっともっと無茶苦茶をされそうだったから、言わなかった。でも、無言の反こうは見のがしてくれたんだから、

ご主人様には感謝しなくちゃね！